



木村光子
小西久二郎 選
宮本照男

特選

補装具の螺子しめ終へて麻痺の子の
一步踏み出す力みつめる

正法寺町 高井 豊

(評) 身に付けた補装具の螺子を締め直し、障害を物ともせず力強く歩み出す感動的な実像が目の前に現われる。「螺子しめ終へて」の具体と「一步踏み出す」の表現法が適切。佳き短歌になった。

特選

新たな五年日記に筆おろす
夢をひろげる青墨香る

米原市 吉川 眞澄

(評) 新たな五年日記に对き合う感慨が明快。これから広がる五年への期待の心が「筆おろす」「青墨香る」の感慨にたっぶり託されている。

特選

米寿過ぐわれに娘の編みくれし
不ぞろいの目の笑う座布団

長浜市 木村 諄子

(評) 米寿を過ぎた私のためにと娘が編んでくれた。目がそろっていない座布団は、まるで笑っているようだという。かえってその方が娘の誠意が出ていて、よかったのではないかと思える。

入選

常しえに美田にあれと名付けしや
小字「久田」に大型店建つ

米原市 成宮 建男

(評) 地名誕生の由来は先祖の大切な思いが隠されている。開発が進むにつれて町の風景も変わり、生活習慣もまた変わりゆく。小字「久田」の具体的な地名が歌の手柄であろう。しみじみとした歌である。

入選

浜風に晒し天日に干されいる
稲架の赤蕪漬け刻近し

芹橋二丁目 古池 陽彦

(評) 名物の赤蕪を稲架に吊しているこの地独特の風物詩。湖畔の風景の中に赤蕪の刻々と変わりゆく色味が目の前に現われる。「漬け刻近し」の自信満々の韻律が見事に読者に伝わってくる心地いい歌。

入選

受話器よりあつけらかなの娘の声に
笑うしかなし螺子外れしに

堀町 河分 武士

(評) 受話器から伝わる少しも気にしないけりとしたさまの娘の声に、返す言葉もなく笑うより他ない。それは恰もねじがはずれたように使いものにならない。親子でも考え方がそれだけちがうのだ。

入選

農を継ぐ団塊世代に明日がある
土地の鼓動に合わせ鋤振る

長浜市 勝木 岩松

(評) 農業後継者の前向きな姿勢が核となる歌材。現今の農業に对き合う心意気、目差が読者を打つ歌である。

入
選

遠雷かはたまた饗庭野演習か

寒気震わす湖西を睨みぬ

日夏町 成宮 惠津子

(評) 遠雷か砲弾かと詠みつつ、作品の底辺には平和を希求する心が伺えるようである。「湖西を睨みぬ」には詮なき思いが直接に伝えられているようである。

佳
作

この夏はこれが最後と吾の手に
妻の乗せたる真っ赤なトマト

東近江市 小林 清次郎

入
選

買い来たるいさぎに混じるエビや雑魚

共に煮ており湖の恵みと

東近江市 古澤 貞子

(評) 買ってきたいさぎに混じっているエビや雑魚も、いつしよに煮ている。これも湖の恵みであると。エビは赤くなつておいしい。近江に生きるものの受ける正に恵みといえるだろう。

佳
作

町内の根気体操に参加して
古い噛みしむる独りの夕餉

鳥居本町 寺村 美恵

佳
作

柄良きと褒めてくれれば亡き妻の
編みしセーター今日も着てゆく

稲枝町 山本 正雄

佳
作

何もかも忘れ惚ける母なるも
蛙の声に目輝かせり

本庄町 田口 洋子

佳
作

「おかえり」に視線をそらせ俯きぬ
しばし見ぬ間のシャイなる男の子

長浜市 樋口 満智子

佳作

高月の観音巡り自転車で
長閑な景の土地柄触れつ

地藏町 佐古徳子

佳作

亡き父母に「ごめん」と詫びつつ処理場へ
わが嫁入りの布団を運ぶ

犬上郡甲良町 村岸千鶴子

佳作

昔日の面影忍び故郷に
五十回忌の読経流れる

鳥居本町 北川夏子

佳作

蝸牛の角のようなる蘭二輪
ともに聞きいる歌会始

松原町 北川満代

佳作

城の庭水戸に向かいてそつと咲く
歴史知らずか二季咲きさくら

東沼波町 石井浪栄

佳作

うづたかき書斎の本のあはひなる
文字褪せたりし反古の稿あり

西今町 松本トシ子

佳作

「元氣だったの」一人にあらざ日向ぼこ
小さき蜥蜴と春を喜ぶ

長浜市 近藤甚一郎

佳作

伊吹背に受けて植えゆく菊の芽の
この一本に華やぎ託す

米原市 日比陽子

佳作

漣を立てて水面に群なしし
余呉湖の鮒の今は見られず

長浜市 桐畑福美

佳作

握りしめ汗水しみた鋤鍬に
力をもらいつ我も種まく

稲里町 勝見政恵

佳作

「何歳か知らないけれどおめでとう」
わが誕生日孫に祝わる

高宮町 細田 惠貢子

佳作

ひと日かけ粥炊きくれし君の味
裡にあたたため介護している

日夏町 石原 不二子

佳作

どうなんだ景気よいか悪いのか
やたらふくらむ朝刊を取る

近江八幡市 浅野 忍

佳作

週一の百歳体操出掛けんに雪ちらちら
咳一つして今日はさぼりぬ

近江八幡市 杉田 豊子

佳作

不揃いの蜜柑あまたや庭のもの
まず仏前に供えただく

米原市 西尾 辰之

佳作

きみと来し桜舞い散る城址みち
遠き日想う老妻とまた来て

米原市 松村 武温

佳作

満席のバスは静寂しじまを運びをり
高校生大方はスマホに夢中

平田町 小堀 由起

佳作

鯉濃にギギナマズフナ湖の味
小骨ありても食したくなり

犬上郡豊郷町 伊香 とし子

佳作

露のとうたんぽぽつくし地上から
はじまる季節心綻ぶ

下西川町 北川 和子

佳作

琵琶湖産いさぎのじゅんじゅん味はひて
びつくりポンと友は言ひたり

犬上郡甲良町 上田 八重子

《総評》

短歌の生命線は作者の感性にあると言っても過言ではない。作品に込められた作者の感動や息遣い、延いては人間性、人生観に繋がるものである。「瞬発力」を生命線とする文学である小さい詩ながら、時には宇宙を手にする器となる文学と思えば、詠むことにも読むことにも体力勝負だと言われることが理解できる。

一方、五・七・五・七・七の定型に収めるというひたすらも重要な器である。詩の質と焦点化、表現技量の研鑽等々に作者の感性が決定的に働く活動であると、自戒を込めて思うことである。

今年の応募数は、ここ数年来の減少傾向にある。研鑽の輪を広げるといふ誰にでもできる即刻の実践に迫られている今である。

木村光子

本年度は応募者がやや少なくさみしいが、問題は作品の質がどうかである。再三目を通したがレベルが高いとは言えない。というのは類型的作品がきわめて多いことである。つまり、頭で考えた歌、机の上の歌、読者を意識した歌が多いことである。やはり、野でも山でも湖でもいいから、現場に立ってよく見つめることである。その場合ただの叙景歌ではよくない。そのなかに自己を投影するかである。だんだん高齢化によって、手足の動きも頭の動きもいぶくなつてゆくだろうが、そうしたなかでどのように努力をつみか

さねてゆくかである。そうでないと自分の世界は見えて来ない。ともすれば惰性に流れやすい気持を、つねにひきしめてゆかねば真の佳作は生まれて来ない。このようなことを念頭に作歌にとりくんでほしい。芸術、文学の世界はきびしい。然し、万葉集にしても百人一首にしても、名歌は永遠に生きている。

小西久二郎

この度、初めて「彦根文芸」短歌部門の選をさせていただきました。日常を正視しつつ写真の基礎を踏まえ主観表現を加えて作者の素顔がいきいきと映し出されてやわらかな韻律と技巧を凝らさず常なる景を歴史的に豊かな文化を大切にしてきたご当地固有の味わいを詠みこんだ作品が多く「城のあるまち ひこね」の風韻を感じさせて頂きました。と同時に苦渋の務めでもありました。

「そもそも、茶の湯の交会は一期一会といひて例えば幾度同じ主客交會するとも、今日の会は再び帰らざる事と思えば、我が一世一度の會也」

これは井伊直弼公『茶湯一会集』の中の有名な文章である。埋木舎での生涯を達観された名言である。文藝という範疇だけでない生き方を問いかけるかのような直截的な言葉でもあります。短歌は自らの心（思い）を感じて一首を詠みあげる。常に基本を忘れず：闊達な気持で共に学びたいと思います。

宮本照男

選者詠

にんげん界おもしろきかと一瞥に
どら猫紫陽花の庭を過れり

木村光子

城のさくら守らむとして生まれたる
「桜守」思ひ花を仰げり

小西久二郎

ありふれて一期一会となれぬ朝
熱き紅茶を呑み干してみる

宮本照男

